

県南沿岸地域でイチゴのアザミウマ類の発生が多いです。

寄生状況を確認し、防除を実施しましょう！

1 作物名 いちご

2 発生現況

- (1) 3月中旬の巡回調査の結果、アザミウマ類の発生地点率及び寄生花率は平年より高かった(図1)。
- (2) 寄生花率の平均は11.2%と、アザミウマ類の被害が多かった令和6年3月に次いで高かった(図1)。
- (3) 県南沿岸地域での発生が多く、寄生花率が60%の園地もある。現在アザミウマ類が発生している園地ではアザミウマ類の増殖に合わせ、これからさらに被害果の増加が予測される。

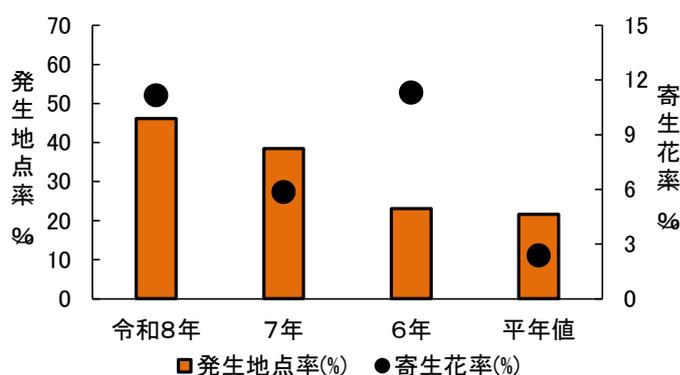


図1 イチゴのアザミウマ類の発生地点率と寄生花率
(巡回調査:3月中旬)

図2 花に寄生するアザミウマ類

3 防除のポイント

(1) アザミウマ類の生態

- ・ アザミウマ類の成虫は花に集中して寄生し、花粉等を食害する。その後、組織内に産卵し、孵化した幼虫が花粉や幼果の表面組織等を食害する。
- ・ ヒラズハナアザミウマは25℃では卵から羽化まで約10日程度、雌の生存期間は約52日、平均産卵数は約500個とされている。

(2) アザミウマ類の基本的な防除

- ・ アザミウマ類は花やガク、幼果の隙間等に生息するため、農薬散布の際は薬液がそれらにしっかり届くように十分な薬液量で丁寧に散布する。

- ・多発時は、卵～幼虫～蛹～成虫まで様々な生育ステージが混在し、1回の散布だけでは卵と蛹が生き残るため、5日間隔で3回の連続散布を行うのが有効とされる。
- ・施設周辺及び施設内の雑草は病虫害の発生源となるため、除草を徹底する。
- ・ハウスへの飛び込みを抑制するため、ハウスの開口部に防虫ネット(白色 0.4mm、赤色 0.6～0.8mm目合い)等を展張する。
- ・アザミウマ類は風に乗って飛来するので、強風時は風上側の天窓を開くのを極力控える。
- ・天敵製剤のククメリスカブリダニ等は、アザミウマ類の発生前～発生初期に放飼することで、アザミウマ類の発生密度を抑制できる。ただし、カブリダニ製剤はアザミウマ類の幼虫を捕食する(成虫は捕食しない)ため、アザミウマ類の飛び込みが多い時期や寄生密度が高い時期は十分な効果が発揮できないとされる。
- ・アザミウマ類の飛び込みの多い時期は、青色の粘着板(商品名ホリバーブルー等)を作物の約 10～30 cm上に 10a 当たり 100～400 枚程度を大量設置し、捕殺する。
- ・IGR 剤(マツチ乳剤等、IRAC:15)は幼虫の脱皮阻害剤のため蛹・成虫には殺虫効果がないが、幼虫による被害が大きいイチゴには有効とされる。
- ・昆虫病原糸状菌製剤(ボタニガード、IRAC:UNF) は害虫に寄生する糸状菌の製剤で、虫体に菌が付着することにより効果を発揮する。安定した効果を出すために、数日間隔で複数回散布を行う。生菌の微生物農薬のため、使用にあたっての注意事項があるので使用前に確認する。環境条件により薬害等を生じることがあるので注意する。

化学農薬の散布だけではアザミウマ類を防除しきれないため、様々な対策を総合的に行い、アザミウマ類の密度を抑制しましょう。

(3) これからの防除

- ・この時期のアザミウマ類の発生は、苗からの持ち込み状況、開花開始時期、周辺植生やこれまで防除状況の影響が大きく、**園地ごとに発生状況が大きく異なる。**
そのため、それぞれ 100 花程度の花を①ルーペで観察する、②花を白い紙の上で軽く叩く、③軽く息を吹きかけるなどのいずれかを週に 1 回行い、褐色～淡黄色の 1～2mm 程度の小さな虫(アザミウマ類)が花にいるかを確認する(図2)。寄生の状況によっては、**薬剤防除に切り替える。**
- ・多発時は栽培終了までを見越し、農薬成分ごとの使用回数に注意しつつ、5日間隔で3回の連続散布を行う。その際は病虫害の薬剤抵抗性の発達を防止するため、RAC コードの異なる薬剤を組み合わせ散布を行う。
- ・4月以降は野外からの飛び込みが始まり、急激にアザミウマ類の個体数が増加するので、定期的に防除を行う。
- ・栽培終了時は、茎葉を持ち出す前にハウスを密閉して蒸し込みを行い、成幼虫を死滅させる。

《お問い合わせ先》 宮城県病虫害防除所

〒981-0914 仙台市青葉区堤通雨宮町4-17

TEL:022-275-8982 E-mail:byogai@pref.miyagi.lg.jp

★宮城県病虫害防除所から『メルマガ』で発生予察情報の発表をお知らせしています★

